



Title	中・四国地方における中世城郭に構築された畝状空堀群
Author(s)	岡寺, 良
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 751-761
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105086
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中・四国地方における中世城郭に構築された畝状空堀群

岡 寺 良

はじめに

近年、全国各都道府県における中近世城郭跡の詳細分布調査が完了し、各地域の城郭の様相が明らかとなってきた。中四国地方では、比較的古い時期から分布調査が行われていたが、最後の山口県と岡山県が完了したことによって全県において完了している。比較的新しい時期に行われた分布調査はかなり詳細に調査が行われている反面、80～90年代に行われた分布調査は、城郭の平面構造の概要を知ることのできる縄張り図が全ての城郭において掲載されておらず、また図面があったとしても地表観察による遺構認識が完全ではないものも少なくはない。だが、そのような地域においても、詳細分布調査が完了した後に、研究者や愛好家によって図面が更新されてきており、中四国地方における中世城郭の様相がこれまでになく明らかになっている状況に変わりはない。また、日本列島各地に築かれた中世城郭の防御遺構には、曲輪や尾根周囲の切岸や斜面に縦堀を何本も連続して構築することを基調とする「畝状空堀群」（図

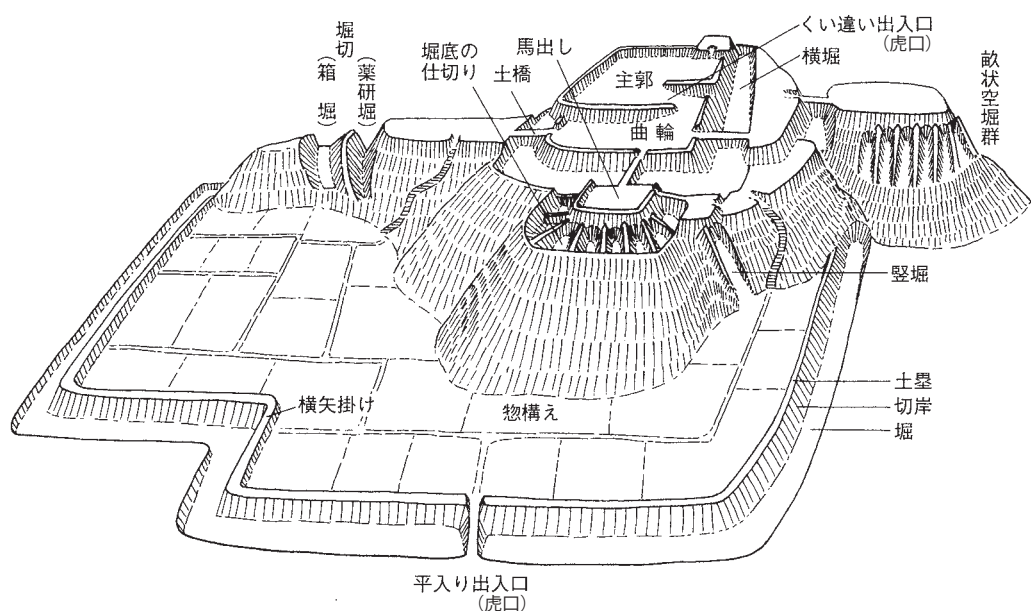


図1 中世山城の遺構模式図（文化庁 2013）

1) がある。すべての城郭に築かれるような普遍的な防御遺構でもないが、比較的全国的に広く分布する一方で、その分布には粗密が見られることが指摘されてきた。筆者も九州北部地方の畝状空堀群を悉皆的に把握したが、その結果、畝状空堀群は一般的に認められる防御遺構であるが、その使用には在地勢力によって指向性が見られ、特に九州北部の密集する分布地域には、国人領主の秋月氏やそれと関係性のある勢力、または秋月氏と直接戦闘状態にあったような勢力に、莫大な構築が認められたことを明らかにした（岡寺 2018）。

九州北部地方に数多く構築された畝状空堀群がどのような背景で構築されるようになり、展開していったのか、畝状空堀群が全国的に分布する遺構である以上は、当該地域のみを考察しているばかりでは、知りえない背景もあるものと考え、本稿では、上記のように考察するに足る情報が出そろい始めている中四国地方を対象として、畝状空堀群構築の分布状況やその背景を探り、九州北部地方との比較を行うことを目的とする。

1. 中四国地方の畝状空堀群の分布

（1）畝状空堀群の分布図作成

中四国地方は、併せて9県、旧国では16ヶ国にも上る広範囲の地方である。そのうち、土佐（高知県）、安芸（広島県）、美作（岡山県）、石見（島根県）などに畝状空堀群の密集が認められるような言及がなされてきた。後述するが、それぞれの地域ごとに調査研究が行われているが故に、それらの地域間の定量的な評価がなされているとは言い難い。そのため、より客観的な比較検討ができるようにするため、筆者がかつて九州地方で行ったように、まずは畝状空堀群が構築された城館の一つ一つを拾い上げるように努めた。また、同じ畝状空堀群を構築する城郭であっても、畝状空堀群と認定する最低限の堅堀の本数3本のものがある一方で、中には曲輪の周囲全体を数十本もの堅堀群で巡らせるものもあり、それらを一様にみなすことでは、客観性を担保できないと考えたため、堅堀の本数に応じてドットの大きさを変えることで、それぞれの城郭の畝状空堀群の規模感を変化させるようにした。

また、従前から言われているように畝状空堀群にも、①単に斜面に堅堀を連ねるもの、②帯曲輪に接するように堅堀群を構築するもの、③横堀と組み合わせて堅堀群を構築するもの、などいくつかの類型に分類することができ、それらが時期差などを示すのではないかと言われてきている（村田 1987、千田 1989）。その一方で、発掘調査を伴わずに埋没状態の地表観察のみでそれらを区別することは困難であることや、明らかに一連のものとして構築された堅堀群の中に、①～③の類型が混在している事例が少なからず見受けられることなどから、これらの類型差が有意な差として現状認めることは困難ではないかと判断しており（岡寺 2018、高屋 2015 など）、まずは畝状空堀群の規模感を示す指標として、本数による定量的な分析を採用し

ている。

今回の分布図作成を行うに際し、基本的には自身による現地踏査は行わず、既往の縄張り図を元に一覧を作成し、そこから図2の分布図を作成した。

なお、一覧を作成するに際して用いた参考文献は以下のとおりである。

- ・山口県（周防・長門）…【山口県教育委員会 2017・2018】
- ・広島県（安芸・備後）…【広島県教育委員会 1993～1996】【小都編 2020】【表 2021】
- ・岡山県（備前・備中・美作）…【岡山県教育委員会 2020a～c】
- ・島根県（出雲・石見・隠岐）…【島根県教育委員会 1997・1998】【高屋編 2013・2017・2024】
- ・鳥取県（因幡・伯耆）…【鳥取県教育委員会 2002・2004】
- ・香川県（讃岐）…【香川県教育委員会 2003】【吉成 2016】
- ・徳島県（阿波）…【徳島県教育委員会 2011】【吉成 2016】
- ・愛媛県（伊予）…【愛媛県教育委員会 1987】【日和佐 2001・2016】【吉成 2016】【(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 2002】
- ・高知県（土佐）…【高知県教育委員会 1984】【大久保 2005】【吉成 2016】

また、上記のように出版物で公開されているものの他、近年はインターネットの普及によって、ネット上のみ公開されている城郭縄張り図も少なからず存在する。中でも web サイト「城郭放浪記」は、一個人でありながら、全国の中近世城館のうち、1 万を越える城郭遺跡の踏査を行い、さらには 800 近い城郭遺跡の縄張り図を作成しており（2024 年 3 月現在）、全国に約 3 万ともいわれる中近世城館の数から考えると、一個人としては間違いなく全国最大級のビッグデータバンクとなっているのは疑いない。特に中四国地方では、これまで縄張り図が作成されていない城館の縄張り図を数多く作図・掲載しており、その図面の高い精度から考えても当該サイトの成果を活用することもまた、中近世城館像の実態に近づくものとして、今回の作業において利用した⁽¹⁾。

（2）各地域の所在・分布状況

図2の分布図を作成するにあたり、作成した畝状空堀群を有する城館の一覧（掲載は割愛）を集計したものが表1である。まず、畝状空堀群が構築された城館総数であるが、中国地方 376 ヶ所、四国地方 122 ヶ所で、全体では 498 ヶ所にも上った。畝状空堀群は斜面に形成される防御遺構であるため、遺構の存在を想定したうえで踏査を行わないと見落としがちであり、時を置いて再び踏査が行われた際には、新たに発見されたり、本数が激増することは十分想定される。だが、そのような危険性を踏まえた上でもこの数は全国的に見ても有数の数だと思われる。以下、旧国ごとにその状況を確認する。

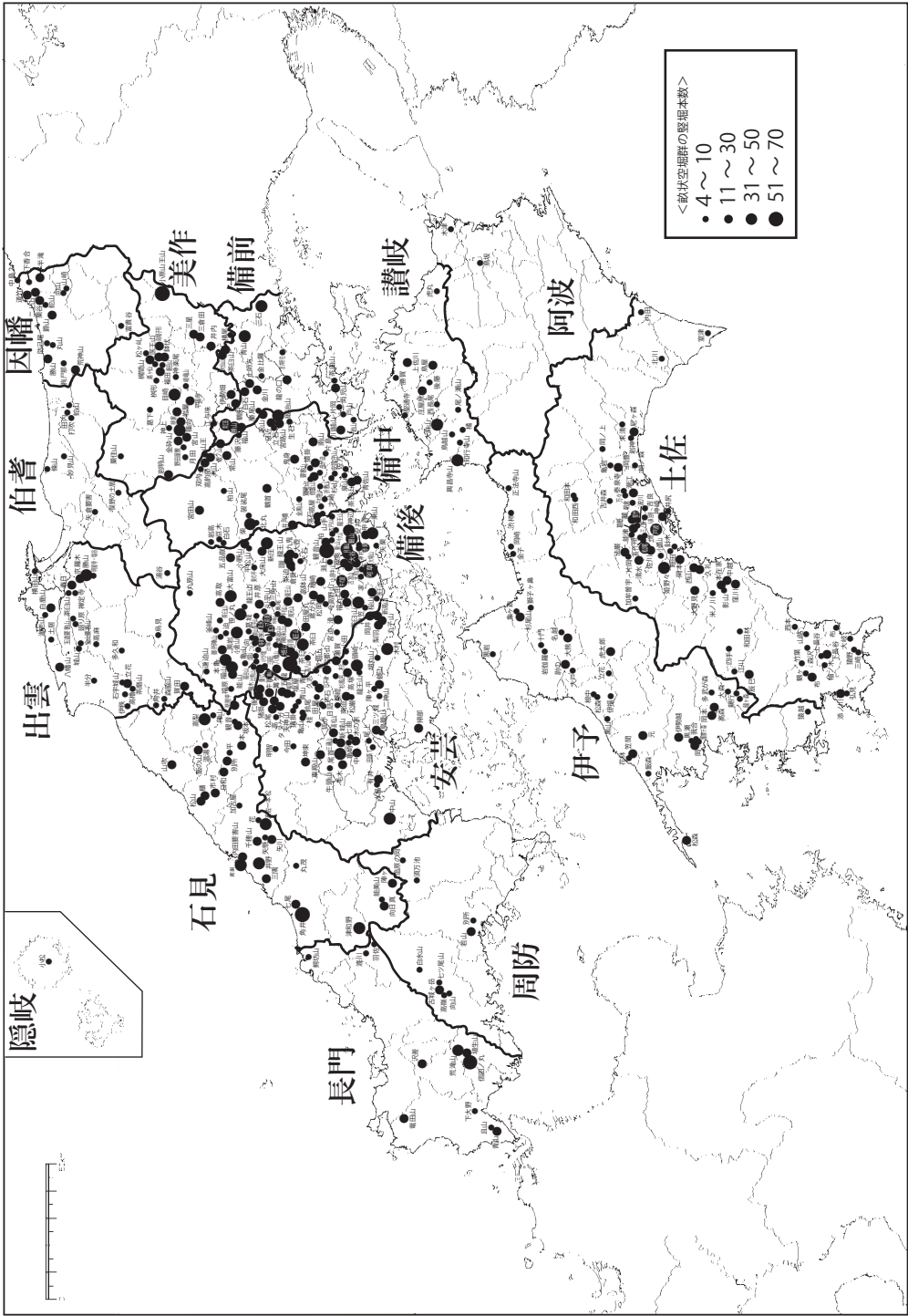


図2 中・四国地方の畝状空堀群を構築する城館分布図

表 1 中四国地方の畝状空堀群の分布表

県 名	国 名	畝状空堀群の堅堀本数					畝状空堀 構築城館数	堅堀 総本数	一城あたりの 堅堀本数
		3～10	11～30	31～50	51～70	71～			
山 口	長 門	5	4	1	1	0	11	223	20.3
	周 防	7	2	0	0	0	9	86	9.6
広 島	安 芸	36	31	4	0	0	71	891	12.5
	備 後	47	38	17	3	0	105	1739	16.6
岡 山	備 中	24	17	2	0	0	43	508	11.8
	備 前	9	9	4	0	0	22	381	17.3
	美 作	11	17	2	1	0	31	471	15.2
島 根	隠 岐	1	0	0	0	0	1	7	7.0
	石 見	8	18	5	1	0	32	633	19.8
	出 雲	20	6	1	0	0	27	280	10.4
鳥 取	伯 耆	8	0	0	0	0	8	56	7.0
	因 幡	10	6	0	0	0	16	169	10.6
香 川	讃 岐	9	3	2	0	0	14	189	13.5
徳 島	阿 波	2	0	0	0	0	2	10	5.0
愛 媛	伊 予	26	11	0	0	0	37	314	8.5
高 知	土 佐	43	23	3	0	0	69	751	10.9
合 計		266	185	41	6	0	498	6708	13.5

①長 門 11ヶ所確認されており、特に西部に多く分布する。東端部に3ヶ所ほど確認できるが、本数も多くなく、石見に接する場所にあることから、そちらの分布域に属すると考えるべきであろう。また、数が少ない割には一城あたりに構築された堅堀の本数は多く、特に山口城下の周辺城館はいずれも多く、荒滝山城49本、信田ノ丸城57本は、中四国の城館の中でも非常に多い部類で際立っている。

②周 防 周防地域では9ヶ所確認されており、西側の古城ヶ岳城周辺に複数集中するほかは、あまり目立った分布は示さない。学史的にも有名な若山城（27本）が所在するが、特に集中する様子はない。

③安 芸 71ヶ所確認されており、中四国地方では備後地域に次いで密集する地域である。ただ、その分布は一様ではなく、東側に分布の中心が偏っており、北東部の安芸高田市域や、中央部の広島市安芸北区に分布の集中域が見られるが、必ずしもその中心に本数の多い城館があるわけではない。31本以上構築される城館は、領域内にまんべんなく確認でき、密集していない西部地域にも事例が確認できる（廿日市市中山城（34本））。畝状空堀群が数多く構築される割には、抜きんで多くの堅堀を構築するような城はあまり見られない印象を受ける。

④備 後 105ヶ所確認でき、中四国の中では最も件数が多く密集する地域となっている。特に北西部の三次市域や南部の福山市域に密集し、それらの中には31本以上構築する城館も少なくない。また、51本を越える事例も3ヶ所確認できる（尾道市阿草城（57本）、福山市観

音山城（57本）、三次市六郎山城（53城））。それであるがゆえに、堅堀総本数も1,739本と際立っている。近年特に城館の再踏査が進められ、急速に見直しが行われている地域といえる。

⑤備 中 43ヶ所確認できるが、西側の備後、東側の美作、備前との国境近くに見られ、瀬戸内海に近い南部地域にも確認することができる。1城あたりの堅堀本数は少なく、31本を越すものが2ヶ所に過ぎない。特に南部地域の城の堅堀本数は少ない印象を受ける。

⑥備 前 22ヶ所が確認できるに過ぎず、美作に接した北部と児島市などの西沿岸部に若干の分布の集まりが確認できる。ただ、数の少なさの割には、31本を越える城が2ヶ所も確認でき、特に北部地域の城は1城あたりの堅堀本数が他地域に比べて多い。

⑦美 作 31ヶ所確認でき、津山市などの中央部～西側に分布の中心が見られる。堅堀本数が一桁の城は11ヶ所に過ぎず、比較的本数の多い城が目立つ。中でも美作市小原山王山城は、堅堀本数が53本と当地域では群を抜いているが、領域の東端に当たり、分布の中心から外れているようにも見える。東側には、今回対象外の播磨地域が接しており、そちらとの関係性を見る必要もあるだろう。

⑧石 見 32ヶ所確認でき、比較的領域全域に平均的に分布している印象を受ける。益田市角井城は、石見の国人領主・益田氏の居城・七尾城の近くに位置するが、堅堀本数が69本にも上り、中四国地域では最大本数を誇っている（図3）。この他にも31本を越える城は領域

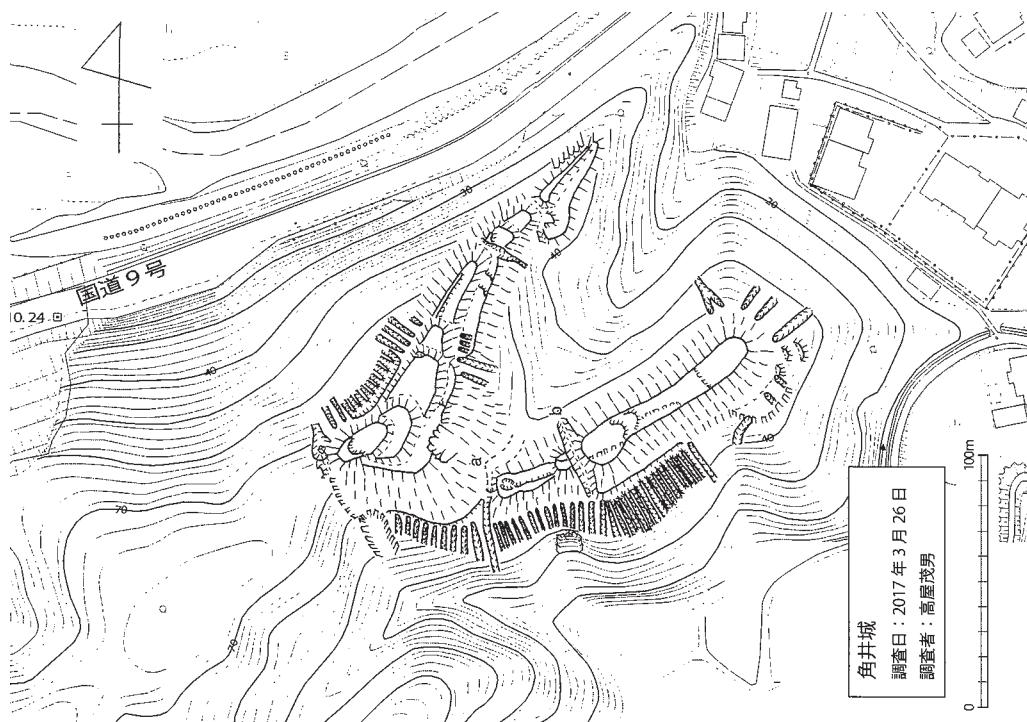


図3 角井城縄張り図（中四国地方で最も堅堀本数が多い）（高屋編 2017）

内に多く見られ、一つの城に比較的多くの堅堀を構築する事例が多い。

⑨出 雲 27ヶ所確認できるが、あまり分布の目立った集中は確認できず、比較的平均的に分布している。本数の多い勝山城（40本）や京羅木城（29城）などは、尼子氏の居城・月山富田城を攻略する際の毛利方の構築によるものであり、それらを除くと、大半は10本以内の堅堀の構築にとどまっている。

⑩隠 岐 島嶼部にあたる隠岐地域では、唯一、小松城（7本）のみで確認されている。今後も確認される可能性は否定できないが、少なくとも集中域をなすようなことはないのではないと思われる。

⑪伯 耆 8ヶ所が確認されるに過ぎず、集中する分布はなく平均的な広がりを見せる。一つの城に構築される堅堀本数は全て10本以内となっており、畝状空堀群が積極的に構築された状況は認められない。

⑫因 幡 16ヶ所が確認されるが、東部・鳥取平野の東側にやや集中する傾向にある。11本以上構築する事例もあり、西側の伯耆よりは本数、城数ともに多いが、31本を越える事例はなく、際立った分布状況は見せない。今回は対象外となっている東に隣接する但馬地域との関係を見る必要もあるかもしれない。

⑬讃 岐 かつては讃岐地域には、後述する阿波同様に畝状空堀群はほとんど構築されない地域であると考えられていたが、分布調査の成果から見ると、14ヶ所確認することができ、一定数分布することが分かる。その多くは10本にも満たない小規模なものだが、中には善通寺市大麻山城（43本）、観音寺市興昌寺山参考地（41本）など、際立って多く確認できる事例がある。これらは本当に畝状空堀群かどうか議論もあり（自然地形の誤認の可能性）、今後慎重に見極める必要があろうが、讃岐地域が一つの分布域をなしていることは疑いない。

⑭阿 波 鳴門市木津城と石井町鳥坂城（共に5本）の2ヶ所が確認されるのみで、畝状空堀群がほぼ確認されない地域である。今後、未発見のものが新たに確認される可能性はあるかもしれないが、ほぼ無分布な状況は今後もさほど変わることはないと思われる。

⑮伊 予 37ヶ所確認できる。基本的には沿岸部や主要街道沿いにまんべんなく構築される印象だが、西予市宇和町域に集中が認められる（伊勢越城、黒瀬城、岡城、我合城、護摩ヶ森城）ほかは、際立った分布は見せない。堅堀本数も大半は10本以内で、31本を越える事例は皆無であり、それなりに分布する割には、一つの城に多用するという指向性はほとんど感じられない。最西端の佐田岬半島の先端にある伊方町松森城はこれらの分布からは大きくかけ離れており、対岸の豊後の影響を受けている考えも提示されている（日和佐2016）。

⑯土 佐 土佐は古くから畝状空堀群が密集する地域としても知られており、その状況を示すかのように、69ヶ所確認でき、備後、安芸に次ぐ状況で、四国で群を抜いて構築城数が多い。ただ、その分布には群らがあり、高知市や須崎市を中心とした中央部と、宿毛市など足摺

岬周辺の南西部に多く集中し、特に高知平野周辺域はかなりの密集度合いで、それなりの本数が構築される城も多い。ただ、際立って本数が多い事例は少なく、31 本以上の事例は 3 例（津野町姫野々城（31 本）、佐川町松尾城（36 本）、土佐市戸波城（33 本））に過ぎず、51 本以上の事例は皆無なのは意外である。

2. 中四国地方の畝状空堀群の分布の特徴

以上のように、旧国ごとにみてきたが、国境域を外し、全体でみるとさらに粗密度合いは如実となる。過密に分布する「密集域」や、やや分布が偏る「小密集域」がいくつか特徴的に見ることができたため、それらをグルーピングすると次のように分類することができる（図 4）。

<密集域 A> 安芸東部～備後～備中南部にかけての一带で、中四国地方のみならず、畿内より西側では最も畝状空堀群を構築する城館が密集する地域である。全国域での確認ができていないため、確実なことは言えないが、全国有数の密集度合いである可能性は高い。この域内でも、特に安芸東北部（安芸高田市周辺）と、備後南部（福山市周辺）は非常に濃密に分布するだけではなく（城館数にして 200 ヶ所前後）、一つの城に堅堀本数 51 本を越える事例も見られる。この地域では畝状空堀群を山城の防御遺構として採用することがかなり普遍化しているとともに、より積極的に用いていたことがわかる。

<密集域 B> 美作中南部～備前北中部にかけての一带で、特に美作中部と備前北部、備前・備中国境域に接する場所に集中する。この密集域では、一つの城に構築される畝状空堀群の数が 11 本を越えるものが多い一方で、10 本以下の事例はさほど多くはないようである。

<密集域 C> 土佐中央部の一带である。高知平野周辺にかなり濃密に分布する。ただ、堅堀が 51 本を越える事例は今のところ確認できず、大規模な城郭において、堅堀群を全周させるような事例はないようである。

以上のように 3 ヶ所の密集域を見ることができたが、それらの周辺域においては、上記 3 ヶ所ほどではないが、明らかにいくつか分布が密集・偏在する地域が確認できた。小密集域として以下に述べる

<小密集域 α > 石見中～南部で、散在的にはあるが、広く畝状空堀群を有する城館が分布する。当地域の特徴としては、一城あたりの堅堀本数が多い事例の割合が高い。選択的にはあるが、畝状空堀群が積極的に採用されたことがわかる。

<小密集域 β > 土佐南西部で、いわゆる土佐一条家の本拠地一带である。濃密に分布するものの、一城あたりの堅堀本数は少ないものが大半を占める。

<小密集域 γ > 讃岐中西部で、これまで畝状空堀群があまり構築される地域としては意識されてこなかったが、今回の分析でそれなりの密集度合いを確認することができた。特に大麻山

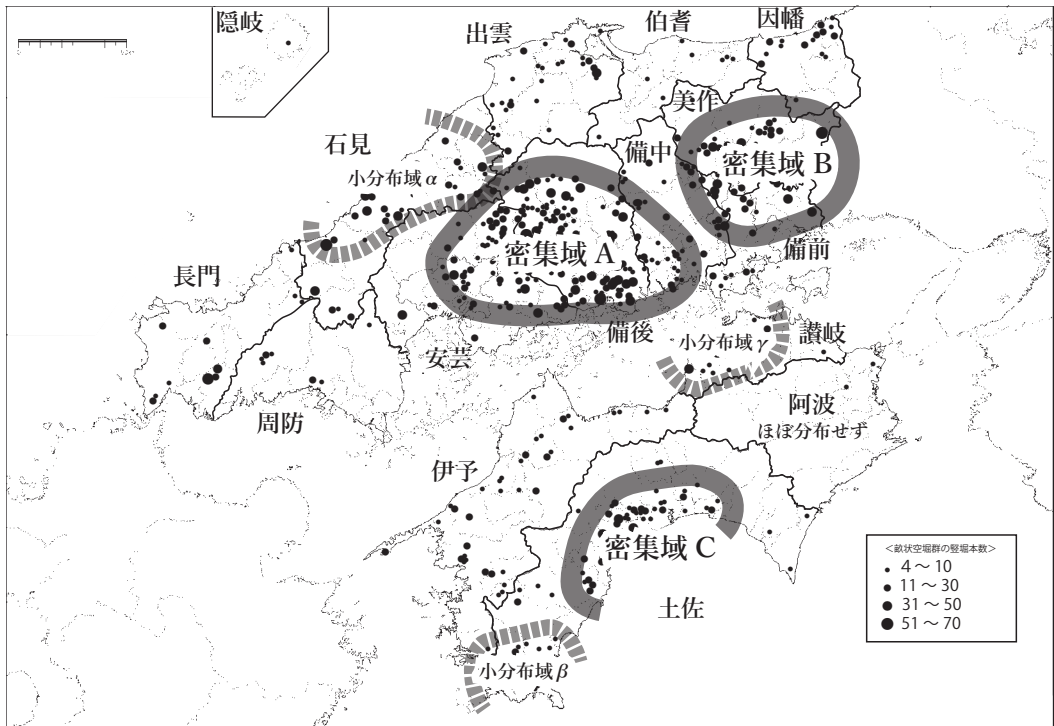


図4 中・四国地方の畝状空堀群を構築する城郭の分布域図

城や興昌寺山参考地は、堅堀本数 31 を越える大規模なものであり、四国内でも多い部類であり、注目すべき存在と言えよう。

<その他地域> その他の地域をみると、密集域の周辺域をなすように、どの地域も一定程度の畝状空堀群の分布が確認できるが、隠岐は1ヶ所、阿波は2ヶ所しか確認できない。それら以外の地域では、畝状空堀群を山城の防御遺構の一つの選択肢として意識されていたのであろう。ただ、これらの周辺域の中でも、分布密度は薄い一方で、因幡、出雲、長門、伊予地域には、一城あたりの堅堀本数が 31 本を越えるような事例がいくつか認められる。山陰地域の事例を見ると、出雲の京羅木城や勝山城のように、尼子氏の居城・月山富田城を攻略する際の陣城など、明らかに毛利氏に関与した事例が少なからず確認できる。このように山陰地方各地の多くの事例には、密集域 A の核をなす毛利氏勢力の関与が考えることができるだろう。同様に、四国でも伊予や讃岐などの事例も、すべてとは言えないものの、従来指摘されているように、密集域 C の核をなす長曾我部氏勢力の四国攻略における構築が多くを占めているものと考えられる。

おわりに

以上のように、中四国地方の中世城館に構築された畝状空堀群について、主に分布と堅堀の

構築本数を軸としてその様相を概観した。畝状空堀群と一言で言っても、様々な機能や用途が想定されており、一概に堅堀の本数だけで比較検討できるものではないが、あくまでもより客観的な比較検討としては目安となるものと考えられよう。

従前から、中四国地方における畝状空堀群の構築としては、安芸、土佐に多く密集することが指摘され、さらには美作や石見などにも密集する地域があることが指摘されてきた（高屋 2015 など）。今回の検討によって、基本的な事実としては従前どおりではあるが、より詳細な粗密具合や分布域の状況をより明らかにすることができただろう。

最後に筆者がかつて行った九州地方における畝状空堀群の事例との比較を行っておきたい。九州、中でも九州北部地方にも、畝状空堀群が多く構築される密集域が存在する。中でも豊前西部～筑前～筑後南部の一帯は、非常に濃密に分布しており、当該地を支配した秋月氏に関連する事例との符号を多く確認することができる（岡寺 2018）。しかしながら、今回の中四国の事例と比較すると、これらの密集域でも畝状空堀群を構築する城館数は 100 を若干上回る程度であり、密集度合いからすれば、今回の密集域 A や B の方が上回っているともいえる。

だが一方で、九州北部の事例には、一城あたりの堅堀本数が 51 を越える事例が 21 もあり、100 本を上回る事例が 5 例も存在している。これは中四国地方での堅堀本数 51 以上の事例が 6 ヶ所、さらには 71 本を越える事例は皆無であることを考えると、九州北部の堅堀構築の異常さが浮き彫りとなることがわかるだろう。

もちろん、単純に比較しただけでの結論は簡単には導き出せず、年代差や、各地域における戦乱の状況などを慎重に吟味していく必要があるが、このような明確な差が何に生じているのか、今後深く検討することで、中世城郭のより明確な発展形成の状況を知ることができるだろう。

畝状空堀群は畿内、関東はもとより東北地方にも分布する中世山城における防御遺構の一つであり、今後もより広い地域での分布状況を見ていくことが必要であろう。

註

- (1) これらの他、未報告・未図化の広島県下の事例については、杉本憲宏氏（備陽史探訪の会）からご教示いただいた。記して謝す。

参考文献・Web サイト URL

- 愛媛県教育委員会 1987『愛媛県中世城館跡分布調査報告書』、愛媛
 大久保健司 2005「連続堅堀群から見た戦国土佐の城」『第 22 回全国城郭研究者セミナー』資料集、東京
 大久保健司 2006「連続堅堀群から見た戦国土佐の城」『中世城郭研究』第 20 号、東京：pp. 178-183

- 岡寺 良 2018「九州における中世城郭に構築された畝状空堀群」『待兼山考古学論集』Ⅲ—大阪大学考古学研究室 30 周年記念論集— 大阪大学考古学研究室、大阪：pp. 781-792
- 岡山県教育委員会 2020a『岡山県中世城館跡総合調査報告書』第 1 冊—備前編—、岡山
- 岡山県教育委員会 2020b『岡山県中世城館跡総合調査報告書』第 2 冊—備中編—、岡山
- 岡山県教育委員会 2020c『岡山県中世城館跡総合調査報告書』第 3 冊—美作編—、岡山
- 小都 隆（編）2020『安芸の城館』ハーベスト出版、島根
- 表 邦男 2021『広島の中世城館を歩く』溪水社、広島
- 香川県教育委員会 2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』、香川
- 高知県教育委員会 1984『高知県中世城館跡分布調査報告書』、高知
- 財団法人愛媛県埋蔵文化財センター 2002『中城跡 底なし田Ⅱ遺跡 元城跡』（四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書XⅨ 大洲市編）、愛媛
- 島根県教育委員会 1997『島根県中近世城館跡分布調査報告書』第 1 集 石見の城館跡、島根
- 島根県教育委員会 1998『島根県中近世城館跡分布調査報告書』第 2 集 出雲・隠岐の城館跡、島根
- 千田嘉博 1989「中世城郭から近世城郭へ—山城の縄張り研究から—」『月刊文化財』305 文化庁文化財部、東京：pp. 37-45
- 高屋茂男（編）2013『出雲の山城』ハーベスト出版、島根
- 高屋茂男 2015「畝状空堀群からみた戦国期城館構成—島根県の事例をもとに—」『西国城館論集』Ⅲ 中国・四国地区城館調査検討会：pp. 61-72
- 高屋茂男（編）2017『石見の山城』ハーベスト出版、島根
- 高屋茂男（編）2024『隠岐の山城 続出雲の山城』ハーベスト出版、島根
- 徳島県教育委員会 2011『徳島県の中世城館 徳島県中世城館跡総合調査報告書』、徳島
- 鳥取県教育委員会 2002『鳥取県中世城館分布調査報告書』第 1 集（因幡編）、鳥取
- 鳥取県教育委員会 2004『鳥取県中世城館分布調査報告書』第 2 集（伯耆編）、鳥取
- 広島県教育委員会 1993～1996『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第 1～4 集、広島
- 文化庁文化財部記念物課（編）2013『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』、東京
- 日和佐宣正 2001「伊予国における長曾我部氏築城技術の導入について—愛媛県東部の事例を中心に—」『城館研究論集』発刊準備号 仮称城館学会、大阪：pp. 13-29
- 日和佐宣正 2016「半島の城郭—愛媛県佐田岬地域の山城—」『戦乱の空間』第 15 号 戦乱の空間編集会、愛媛：pp. 68-88
- 村田修三 1987「城の分布」『図説中世城郭事典』第 3 巻、東京：pp. 8-11
- 山口県教育委員会 2017『山口県中世城館遺跡総合調査報告書』—長門国編—、山口
- 山口県教育委員会 2018『山口県中世城館遺跡総合調査報告書』—周防国編—、山口
- 吉成承三 2016「畝状空堀群から見た四国の城館—土佐国の事例を中心に—」『第 33 回全国城郭研究社セミナー シンポジウム「連続空堀群再考」』資料集、東京：pp. 124-138